

「いのちの育ち」

菊田行住

「8それで、わたしは、あなたのなすべきことを、キリストの名によって遠慮なく命じてもよいのですが、9むしろ愛に訴えてお願いします、年老いて、今はまた、キリスト・イエスの囚人となっている、このパウロが。・・・14あなたの承諾なしには何もしたくありません。それは、あなたのせつかくの善い行いが、強いられたかたちでなく、自発的になされるようにと思うからです。・・・16もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、つまり愛する兄弟としてです。」（フィレモンへの手紙8，9，14，16節）

今、高校の部活動や柔道の女子全日本代表で、体罰のことが問題となっています。その背景には、一部の体育系の分野に限られることでなく、日本社会に依然として根を張っている暴力構造の問題が横だわっているように思われます。

体罰が依然としてスポーツの世界で、ある説得力を持って支持されている理由の一つとして、「強くなって勝つためには、厳しさも必要である」という価値観が根底にあると考えられます。ここには、大会などで優勝したり、有名になるというようなことが、最も価値ある目標として掲げられるというものです。その目的を達成するためには手段を選ばず、たとえ暴力を振るってでも、勝利さえすれば、その手段は黒でも白になるといった考え方によって支持されているものと思われます。これらは、意外なようにも思えますが、体罰を受ける側にも見られるもので、体罰の有無を尋ねるアンケートなどに、「確かに失敗した時は罰として叩かれることかあるが、それは自分たちを強くしようと先生が願ってのこと。先生は悪くない。」といった体罰を是認する意見が、子どもにも親の方にもかなりあることから何うことが出来ると思います。しかし、どうでしょうか。本当に、相手に勝利することが、部活動などの特に人格を養う期間である学校教育において、一番大切なことなのでしょうか。例えば、その延長線で、オリンピックで金メダルを取れたとします。ただ、その後のその人の人生の目標は、何を目指して行くのか。その大きな価値のある金メダルを、何のために用いるのか。そのことも含めて、あるべき生きる姿勢を、子どもたちに身に付けさせて行けるかが、親や教育機関に携わる人の使命なのではないでしょうか。

大学のアメリカンフットボールで、以前、東西においてそれぞれ名門のチームがありました。両者とも、その世界では名前を知られていましたが、そのスタイルは大変対照的です。東のそのチームは、管理主義的で、監督から選手への指示系統はトップダウンで、選手から監督への意見提示ということはありませんでした。その監督の指示は私生活にまで及び、部員は皆丸刈り、門限を定める等、細かな所にまでおよんでいました。片や西のチームは、全員参加型で、チームの戦術や方針も、全て選手たちのミーティングによって運営されます。そのチームの方針は、話し合われる過程を通して、選手はみんな、一人一

人議論を通して納得した上で、遂行されて行くというものです。大会の結果から言えば、このどちらのチームも、大学選手権で優勝しました。よって、優勝するという事に最大の目標を置くのであれば、どちらのやり方でも良いということになります。しかし、その部員たちが、大学を卒業して、社会人として生きて行く上で役立つということの方を、より大切な目標として考えるならば、この二つのあり方の間には、大きな差が出てきます。東の方のチームに育てられた部員は、強いリーダーシップを取る人がそこにいれば、その指示通りに動いて、成果を発揮することは出来るでしょう。しかし、自分で考え、自らの主体性において働くことが求められる所では、その術を知らず、対応出来ないこととなります。やはり、西のチームのように、常に自分で考え、そして他者と意見を交わし、その中から共通した方針を導き出して行ける姿勢を養われた者が、そのようなあらゆる状況に対処出来て行けるわけです。

相手の意見を一切聞かず、一方的に指示を与え、服従させるというやり方は、暴力以外の何ものでもありません。そして、体罰という名の暴力は、痛みという罰への恐怖によって、相手の精神をコントロールする手段です。ですから、相手が痛み慣れて、恐怖を感じなくなれば、より大きな痛みを加えることによって、恐怖を維持して行かなくてはなりません。そこには、健全な人格の成長ということは望めず、自分へ恐怖を避けるための問題回避型、他者依存型の人格を形成することになるでしょう。また、その反対に、暴力によって支配される恐怖から逃れるために、先手を打って他者を暴力で支配しようとする人格を形成させてしまうということも考えられます。つまり、こうして暴力による支配構造が再生産されて行くということでもあります。

冒頭の聖書箇所は、パウロというキリストの弟子が、フィレモンという他の弟子に宛てた手紙の一節です。フィレモンは、パウロからすれば後輩にあたり、しかもパウロといえはいくつもの教会を建てて、皆がその権威を認めている立場に立った人でした。しかし、パウロは、高圧的に自らの権限を振るおうとしていたフィレモンに対して、強制的に指示を出して言うことを聞かせようとはしませんでした。むしろ、自発的にそのこと止めることを選び取って欲しいと自らの思いを述べるに留めます。このことをパウロは、フィレモンが持っている愛に訴えかけるのだと言います（9節）。ここには、相手を強制力によって言うことを聞かせても、それは長続きするものではないし、根っこからその相手が変わることは、見込めないという人への洞察がまずあります。強制力や暴力による恐怖は、その場で人を変えられることはあっても、深いところからの変化というものは起こせないということです。怖さがなくなれば、また、元に戻ってしまい、同じことを繰り返します。パウロがここで、フィレモンの持っているはずの愛に訴えかけただのは、人間が本当に変わるのだとしたら、自らがより良き者になりたいという、自尊心に賭けるしかないと考えているからです。ここでは信仰者の二人なので、キリストへの優に訴えかけていますが、キリストの思いに応えたい、やっぱり、キリストの教えに立ち返りたいという、一時的に忘れてしまっても、再び戻ってくるべき所に、賭けているのです。パウロはまた、我々は誰の奴隷でもな

いということに思いを向けさせます(16節)。神の御手の中では、誰にも支配されてはならないし、誰をも支配してはならない。神が与え、常に注いでいるいのちを、互いに何よりも尊重しなければならないという、イエス・キリストがもたらしたその良き知らせに、フレモンの心に向かわせることに、パウロは懸命でありました。

このような対話によってすべてのことを進めて行こうとする姿勢が、キリスト教の生命線であります。このあり方を失ってしまえば、まだまだ暴力的な日本の社会のあり方に対して、キリスト教が存在する意味を失ってしまうでしょう。神が生かしてくれている私たちのいのちは、誰かの奴隷になって生きながらえるだけのいのちなのでなく、積極的に他者と繋がって行くいのちなのです。暴力でなく、恐怖でなく、対話という愛の行為によって育まれて行かなくてはならないいのちです。そのことを、キリスト教、そして教会は、自らのあり方を含めて、懸命に求めて行かなくてはならないと思います。そのことが、キリスト教、教会がなさなくてはならない、神から与えられた使命の大切な部分だと考えるからです。

私たちは、誰かに勝つことより、大切なものがあることを伝えて行けるようになりたいと思います。結果だけでなく、そこに至るまでの手段の正しさが大切なのだと示せるようになりたいと思います。